

鮮烈な画面に秘めた 絹谷幸二の “双眼”への思い

情熱ほとばしる独自の画風で知られる絹谷幸二。

その半世紀に及ぶ画業を通覧する
展覧会の開催が間近だ。

新作を描き上げたばかりの画家を訪ね、
いよいよ高揚する創作への思いを聞いた。

exhibition

絹谷幸二
色彩とイメージの旅

8月22日～10月15日
京都国立近代美術館

特別展示
アフレスコの傑作
『光ふる街』初公開

8月16日～11月27日
大阪・絹谷幸二 天空美術館



エネルギーを描きたいという絹谷は《富嶽旭日風神雷神》にも自然の力を重ねている。2017年 ミクストメディア、カンヴァス 2点組 各194.0×130.3cm



京都を画題にした7点の連作より、龍が上賀茂神社の立砂に舞い降りる《朝陽龍神下山上賀茂神社》。135頁は本作の部分。連作のすべてに龍が描かれているのは「鴨川は龍だから」。2017年 ミクストメディア、カンヴァス 259.0×97.0cm



完成したばかりの出品作《『平治物語絵巻』三条殿焼討》の前に立つ絹谷幸二。「これは平治物語絵巻へのオマージュ。京都を燃やしちゃったと言われるかもしれないけれど、戦争と平和という切り離しては考えられない世界を示したかった」。アトリエにて。撮影＝広瀬達郎[本誌] 掲載作はすべて「絹谷幸二 色彩とイメージの旅」展の出品作。



初期の代表作のひとつ《アンジェラと蒼い空II》。本展では、同年に描かれた《アンジェラと蒼い空I》と初めて同時展示される（前期のみ、9月18日まで）。1976年 漆喰・顔料、カンヴァス 194.5×259.5cm 東京国立近代美術館蔵

画面を同時に見るべきだと考える。「《富嶽旭日風神雷神》の上部は晴天、下部は嵐です。晴天と嵐が雲を境につながっている。私がここ何年かテーマにしている『不二法門』は大乗仏教の經典のひとつ『維摩経』が説く思想で、相反すると思われている概念は決して別々のものではなく、ひとつのものの部分であるという考え方です。

絹谷幸二（1943年生れ）といえば鮮やかな色彩を思い浮かべる方が多いだろう。その特質が萌芽したのは東京藝術大学大学院を修了後、イタリアに留学してからである。価値観の異なる地で暮らすことが自身の中に変化をもたらした。同地でアフレスコ画（フレスコ画）を習得して帰国すると、その古典技法を用い、現代的発想と鮮やかな色彩で描いた《アンセルモ氏の肖像》で安井賞を受賞。以後、独自の世界観を開拓していく。《アンジェラと蒼い空II》「左頁下」にも見られるが、画中に文字を書き込む手法も斬新で、その先取性が批判されることもあった。80年代に入ると色づかいはより奔放になる。近年は記紀神話や仏像をモチーフに、日本人の本質を考えさせられる作品も多い。そんな絹谷の、初期から現在までの画業を通覧する個展が開催される。

本展に出品する新作が描き上がった6月中旬、画家のアトリエを訪ねた。新作は、開催地である京都の風景を描いた作品が中心だ。「見たままの風景ではなく、人間と土地との関わりを絵にしました。京都ではありませんが、分かりやすい例でいうと赤富士。これは砂鉄が影響した現象です。その砂鉄が野山でフルボ酸鉄と合体して海に流れ込む。これをフランクトンが食べ、エビやカニ、魚が食べ、我々が食べる。だから自然が美しくなければ、人間は変調をきたすわけです。また石灰岩が多い山の水には石灰が多く含まれるので、胆石や膀胱結石になりやすい。ヨーロッパでワインを飲むのは、葡萄は石灰を吸収しないからです。一方、日本の軟水は日本酒を生みました。人間と土地にはつながりがあります。それを広い視点でとらえて風景を考えたいのです」

人間の心の中には善と悪が同居しているし、社会は平和が損なわれると戦争になる。あるいは古いものを知ることで本当に新しいものが生まれる。両方を観察する、〃双眼〃で理解する、その大切さを絵を通して伝えたい。善か悪か、イエスかノーかという一神教の考え方ではなく、神仏習合という思想がもつと世界に認められてもよいのではないか、そんな願望もあります」